

第 2 部

東京シューレと フリースクールの 25年の歩み

- 東京シューレの歩み 25年 奥地圭子 (24ページ)
- 東京シューレ 25年の年表 (34ページ)

東京シューレの歩み 25年

特定非営利活動法人東京シューレ理事長

学校法人東京シューレ学園理事長

奥地圭子

◎東京シューレの始まり

学校外の子どもの居場所・フリースクールである東京シューレがオープンして25年の月日が流れました。開設は1985年6月24日、北区東十条の小さな雑居ビルの一室。スタッフといえば私一人。たくさんボランティアがかかわって下さり、小4～中3の、主として登校拒否の子どもが学び、交流し、活動する場としての日々が始まりました。

今は、フリースクール、フリースペースの存在は知られるところとなりましたが、当時は、放課後なら学習塾へ通うなどありますが、学校のある時間に、子どもが別のところに行くなど、考えられないことでした。また、どうということになっていくのかもよくわかりませんでした。しかし、私自身、自分の子の登校拒否から自分の持っていた学歴社会の価値観や普通主義の見直しを迫られ、学校中心のもの見方から、子ども中心の見方へ変わり、そこから教育というものを見直すようになっていました。学校教育がいかに子どもに抑圧的であり、非人間的であるか、親・世間の尺度がいかに親子の信頼関係を邪魔しているか、子どもが学校と距離をとることは自然であるにもかかわらず、学校にも家庭にも居場所がなく、どれほど苦しいか、ということが見えてきました。

1984年1月、つまり、東京シューレがスタートする1年半前に、私は、渡辺位さんが在勤されていた国府台病院の中にあつた「希望会」の仲間や、夜間中学、わかる子をふやす会の塾の人たちによびかけ「登校拒否を考える会」を始めました。その会は、当時、登校拒否は軟弱な性格や精神状態の子になるものだから、戸塚ヨットスクールのような矯正施設で鍛えなおすか、心の病だから精神科に入院させないと治らないとして薬づけになるなどの治療で対応されていたことに悼さず流れであり、まず親が変わり、子どもが安心して暮らせる居場所に家庭になることをめざしました。また子どもの苦しい状況を変えるには、学校のあり方や文部省の文教政策、社会の価値観を変えていく必要も感じていました。この会の活動から、子どもが育つのは学校だけではないこと、元気になった子ども達が、友達が欲しいといい、家は退屈といい、学べることを求める声をいくつも聞いて、東京シューレ開設につながったのです。私自身は、当時、小学校教員をやって22年経っていましたが、教師としても学校にたくさん矛盾を感じ、もっと競争や管理によらないのびのびと生命が育つ場がほしいという思いと、親として「考える会」をやってきて登校拒否の子ども達の居場所がほしいという思いと2つの思いが一

致して、教員を退職、会の皆さんの協力で、一歩をふみ出したのでした。

スタート時、10年くらいあれば、登校拒否への偏見もとれ、諸外国にあるような、学校と対等なフリースクールをやっているかな、と想像したのですが、まだまだそうはなっていません。何事も想像のようにはならないも

のです。しかし、現実には予想以上に豊かだったといえましょう。また、当初想像したよりも、東京シューレははるかに大きく活動が広がっています。

以下5期に分けて、東京シューレの歩みを述べてみましょう。およそ5年ずつくらいで変化しているのがわかります。

第1期 ● 1980年代後半（東十条時代）

1985年3月から1991年3月まで、6年間借りた東十条の丸重ビルの時代が、東京シューレの土台をつくったといつていいでしょう。85年3月～6月は、「これでOK」という意味と私の名のイニシャルをとって「OKハウス」と名づけたら、何と住宅会社と間違えて何人もの人が訪ねてきて、そこに昼間から子どもがいたので、驚かれました。

6月24日に東京シューレの説明会とオープニングパーティをやった時は20人くらいの子が見に来てくれ、狭い室内はいっぱい、という感じがすでにありました。オープン後1年もたたないうちに中野富士見中のいじめ自殺があり、当時いじめから緊急避難するようになっていた子が多かったので、「鹿川君も登校拒否していたらよかった」「東京シューレを知っていたら自殺しないで済んだかも」と子どもたちは言っていました。86年には、また不動産事件ももち上がりました。登校拒否の子が矯正施設である農家で、ちゃんと学校へ行けないのに退塾したと責められ、262回も塾長・塾生から金属バット等で殴られ死亡しました。その時も、子ども達は「僕だったかも知れない」「お母さんが東京シューレを見つけてくれて良かった」と言いました。

通ってくる子ども達は、一人じゃないと分かったり、学校へ行けないダメっ子というこ

とじゃない、自分らしくやっていっていいと感じたりして、自分を取り戻したり、元気で日々を送っていきました。ミーティングで何でも決めていくのですが議論白熱の日も多かったです。東京シューレ通信ははじめ私の手書きでしたが、1年後からは子ども達で発行しました。2年目から西野博之さん、3年目から上間（木村）砂織さん、佐藤由美子さんというふうにスタッフも増やすことができ、またアパートも87年に1軒、89年に1軒というふうに子どもの人数の増加につれて借り足しました。

東十条時代、登校拒否への偏見に対し、子ども達はたたかいました。そういう意識だったかどうか別にして本質的にたたかっていたと思います。1988年5月、「ぶっとばせ！ 体罰・校則・退学処分—子どもたちの人間宣言」シンポジウムへの取り組み、朝日新聞トップ記事の「20代30代まで尾を引く登校拒否症、早期完治しないと無気力症に」という稲村博氏の治療論に、市民達で緊急集会を開いた時に多くの子が反論、11月に文部省から発表された登校拒否は「怠け」であるという調査に対して、「子どもがやったらちがうのではないか」と「登校拒否の子どもによる登校拒否アンケート」を実施しました。そして1989年「ぼくらは苦しんだ経験が多く、怠けとはいえない

い」という子どもの結論は、マスコミにも取り上げられ、手づくり冊子は2000冊も売れ、その後の文部省調査は「中学生は学校の原因が第1位」となるなど変化するのですが、子ども達の活動が影響を与えたと思います。

市民側の動きは活発で、90年1月、各地に増えた親の会・居場所をむすぶ「登校拒否を考える各地の会ネットワーク」(現在のNPO法人登校拒否・不登校を考える全国ネットワーク)を発足させ、その後ずっと東京シューレが事務局を担当しています。

そんな動きの中で、文部省は、90年11月「登校拒否はどの子にも起こりうる」との認識転換を示す「学校不適応対策調査研究協力者会議」の中間まとめを発表したのです。

北海道緑町で無料で公民館を借り受け、夏

合宿を3年間やったり、山口県精神保健センターのつながりで五右衛門風呂のある川上村で合宿したり、90年12月には、五周年祭を大きく挙行、はじめて子どもの手による登校拒否の本(『学校に行かない僕から学校に行かない君へ』)を刊行、これらの全てが、子ども達中心の活動であり、それを親のみなさんが、あたたかく見守っていました。父母会の参加率も高く、子ども達も親達も一体感がありました。

20周年の時に実施したOB・OGアンケート『今、ここに生きている』をみても、苦しい状況の中、当時東京シューレが大きく意味をもっていたことがよくわかる結果となりました。

第2期●●1990年代前半

場所が狭くてしょうがなく、また入会を待つ人々のリストが100名を超え、移転を決意した90年、子どもも「場所さがし委員会」などを作り場所を探し、大人も色々当たり、いったん吉川町の物件を契約、しかし、今の王子シューレが見つかり、吉川を解約、王子に移転してきたのが91年3月。大きくなった東京シューレをきちんとやっていくため、父母とスタッフから選出したメンバーで運営委員会を発足させました。

この時期も、子ども達は、楽しむ活動と共に、疑問に思ったことに取り組み、変えようという活動をパワフルに行いました。91年7月には、広島で風の子学園事件が起き、戸塚ヨットスクール裁判の軽すぎる判決が出て、奄美大島では、登校拒否追放運動が起きていましたが、それらの動きに、追悼集会やメッセージの発信、調査団の派遣を行いました。

91年7月には、前年の神戸校門圧死事件追悼と抗議のため、王子ビルの屋上から大きな垂れ幕を下ろしたり、チェルノブイリ被爆救援活動の一環でロシアの子どもと交流するために6人の子どもが市民団と共にロシアを訪問しました。

92年、先述の協力者会議の答申(本報告)が出され、フリースクールもガイドライン付きで、お金は出ないが存在を認められることになりました。

これに勢いを得、大きな成果を残した運動は「通学定期券の実現」でしょう。子ども達から始まった交通費の調査、大人も立ち上がっての署名運動、議員を訪ねたり、文教委員会に出たり、子どもも大人もがんばりましたねえ。運動が実を結び、ついに93年4月より、全国でOKとなり、どこのフリースクールも在籍学校の校長裁量ですが、小中学生は安く

通えるようになりました。

この時期は、シュールが拡大した時期でした。94年には、大田シュールが、95年には新宿シュールが誕生し、3つのスペースでフリースクール活動を行うようになりました。

また、先述した文部省の答申から、92年9月、フリースクールへの出席を学校の出席と認める通達を出したため、出席日数稼ぎのために東京シュールヘイイイヤ来る子が増え、どこかへ通わせないと承知しない日本の意識を変えるために、「家でだって育つよ」という在り方の普及につとめようとホームシュールを出発させました。93年から試行的に行い、94年にはマリオンで、入りきらないほどの人

第3期●●●1990年代後半

この時期は、活動分野が広がる時期ととらえることができます。夢のようなことも実現しています。

内部でとても大きかったのは、長野県麻績村に、ログハウスを建設したことです。中学生の男の子が言い出して4年半、実行委員会が始動して2年半、ついに完成した感激は忘れられません。雨の中や寒い日の作業など含めつらい日も多かった中、中心になった子ども達の力はすごいものがありますが、大人のサポーターの協力も感謝しています。竣工式は96年10月でした。

また、新宿シュールの民族講座から始めて、ついに沖縄旅行に発展、97年7月、40名余りが2週間にわたって、現地で不登校シンポを開きつつ、最南端の与那国島まで行った中で得た体験は大きいものでした。97年11月には、不登校フェスティバル「学校だけじゃないんだよ」を開催、1000名の参加者があった会場に、この年の秋、青森県弘前まで出か

を集め「ホームエデュケーションの国際シンポジウム」を行い、本格的に活動を展開していきした。

海外交流の取り組みも活発となり、93年シアトル1ヶ月、94年日米フリースクール交流1ヶ月、95年ユーラシア大陸横断活動1ヶ月、と自分達で企画・準備、視野を広げ、実行力を高めました。10周年祭が大きく行われましたが、その時『僕らしく君らしく自分色』と『学校の外・海の外』の2冊を、子ども中心に準備し、発行しました。

世の中では、文部省の答申後、しだいに登校強制が姿を変え、ソフト化していきました。

けて現地の人に教えてもらいながら作ったねぶたが運び込まれる、というダイナミックな催しとなりました。

この期に、子ども達は、仲間を募って再び国会や厚生省に自ら出向き、考えを伝え、状況を変えるために動きました。というのは児童福祉法の改正案の中に、教護院を「児童自立支援センター」とし、不登校児童生徒を入所対象にしようという方策があり、子ども達は「なぜ不登校だと入所なのか」と「子どもの声をぶつける会」を発足させ、さまざまに取り組みました。結果として超党派で「不登校という理由では入所対象にしない」という付帯決議が付き、成果を得たのでした。

また、98年には、東京シュールが大きく協力して、全国不登校新聞社が設立されました。

東京シュールにとってこの期の終わりに、大きな変化が2つありました。

一つは、99年に東京シュールがNPO法人の認証を都から得たことで、今では法人とし

て活動し、11年目に入ります。もう一つは、同じ99年に、シューレ大学が出帆したことです。オルタナティブな大学で探求や表現を目的に、何年いてもよく、学生の手で運営する大学が生まれるとは初期には考えられなかったことであり、09年度には10周年記念イベントを開催、その後も面白い展開をしています。

もう一つ、大きくこの期に進んだのが、世界のフリースクールとの交流です。97年イギリス・サンズでのI D E Cにスタッフ1人、98年にウクライナでのI D E Cに子ども3人とスタッフ、99年に、イギリス・サマーヒルI D E Cにあわせて15人参加、そこで、日本で開催したいと子ども達が立候補し、ついに

2000年、世界フリースクール大会を開催することになったのです。19ヶ国1300人も参加がありましたが、N P O法人になっていたため助成金を貰いやすくなったのも、大会を成功させたと思われます。

この期は、適応指導教室やスクールカウンセラー設置など登校刺激はソフトであったとはいえ、学校復帰のために行政関係に多くのお金と人が投入され、不登校対象の高校も生まれ、少子化を背景に民間でも塾産業のフリースクール参入やサポート校設置など進み、東京シューレの入会者の数は伸びなくなりますが、質の拡充があり、21世紀を迎える土台になったと思います。

第4期●●●●2000年～2005年

2000年I D E Cを受けて、国内にもフリースクールネットワークがほしいという機運が盛り上がり、I D E Cを中心に担ったシューレの若者が奔走し、01年2月に「フリースクール全国ネットワーク」が誕生、N P O法人として活躍するようになりました。以後、スポーツ大会やカルチャーフェスティバル、夏の全国子ども交流合宿などをすすめていきますが、ほとんどの年、これらの活動も東京シューレの子ども達とスタッフがかかわり共に創っていきました。

また、I D E Cを日本で開催したこと、シューレ大学でオルタナティブな教育研究活動が位置づいたこともあり、国際的な交流や調査がとて進みました。特に日韓交流は毎年とても盛んに行っており、子ども・シューレ大学生・スタッフとも密度の濃い交流をしています。02年にはニュージーランド、03年にはアメリカ、04年にはインドで開かれたI D E Cに多くの参加者がありました。また、

ペルーの働く子ども達の全国組織「ナソップ」との交流も、子どもの権利、子ども中心の活動の育成ということで大きく学べた一つでした。

これまでの東京シューレの活動が評価され、03年に、吉川英治文化賞と朝日のびのび教育賞を受賞しました。子ども達が作ってきた活動が、社会的に認められたと思ってありがたく、子ども達と授賞式にのぞみました。いまあるカプラや照明器具は、その賞金で買ったものです。

しかし、いいことばかりではありません。世の中の憲法や教育基本法改正の動きに表れているように、バックラッシュの動きは強く、不登校の世界でも、文科省が第2回の協力者会議を開き、03年4月、不登校の子どもに働きかけを強めるようにという答申が出されました。その前後から登校圧力が強まり、不登校減少政策の中で苦しい思いで登校する子が増えました。「不登校容認の風潮が増加の原因だ」

などといい、子どもの休む権利、自分らしく在る権利は奪われ続けました。

この協力者会議については、市民連絡会議を発足させ、東京シューレを会場に緊急集会を開いたり、文科省と話し合いをもったり、アピールを出したりしているうちに、予定になかったようですが、協力者会議のヒアリングを15分間受けることになりました。「子どもの最善の利益」という言葉が入ったり、取り組んでよかった面も少しはありましたが、学校外の場を認め、社会的に保証しようという方向が少しは出るとの期待は裏切られました。しかし行政とNPOとの連携が謳われていたこともあり、思いがけなく2005年5月、文科省は、これまでとちがってNPOの教育団体と現場の声を聞くため、懇談会をひらきました。遠方のNPO団体には交通費を出し、20団体ずつ計3回にわたり計60団体の声を聞いたのです。当日の当時の文科政務官は、「皆さんの活動の意義を感じ、感謝している。今や学校教育だけで子どもの成長を担いきれると考えていない」と語りました。

また学校復帰にこだわらない不登校支援の委託研究事業を東京シューレも受けることになり、750万円の公的資金が決定されました。

第5期●●●●2006年～

(1)

21世紀に入って、2000年代の後半は社会情勢の悪化と、それに抗して、不登校の子どもたちの権利の拡充を少しずつ闘いとり、多様な育ちの在り方を社会に実際的に広げようという取り組みをしてきた、といえます。

社会情勢の悪化とは、世界的グローバリズムを背景にする小泉内閣の政策の中で、競争原理が激化し、社会構造の問題にも関わらず、

そして、中教審の義務教育部会から「子どもをフリースクールに通わせる親を、就学義務を履行しているとみなすことも検討を始める」という提言が出されました。こうしたことはこれまでで初めてでした。文科省の固い殻が、今までとは少し違って来たという感触を得たのも事実です。

6月には、東京シューレは新橋「ヤクルトホール」で盛大な20周年祭を行いました。プログラムの最終は、1年に1人、つまり20人のOB・OGに登場してもらい、1人たった2分でしたが、当時の印象ひとことと今、どう生きているということをお話してもらいましたが、それが圧巻でした。中には、タクシーで仕事現場から駆けつけ、自分の発言にかろうじて間に合わせてくれた人もいましたが、「みないろいろな生き方で生きているなあ」と言うことに感謝を受けた、元気が出た、と多くの参加者から伺いました。

20周年記念として『子どもとつくる 東京シューレ20周年の物語』『学校に行かなかった私たちのハローワーク』を、シューレ育ちの若者と支援者で立ち上げた「東京シューレ出版」で初刊行しました。

自己責任が強調され、「勝ち組」「負け組」という意識が強まり、非正規雇用が増えるという状態が生み出されました。それに輪をかけるように07年8月、アメリカから端を発した世界的不況は、日本も直撃、派遣切り、就職内定取り消し、リストラなど続く中、08年には世を象徴するかのようには秋葉原無差別殺人事件が起き、格差社会の到来と言われ、年越し派遣村なども開設されるという時代になり、

とりわけ若者にとって生きづらい社会となっています。

教育の世界でも、06年改正教育基本法が成立、基本的人権の尊重よりも国家・社会のための人材育成の方向に舵が切られ、授業増などゆとり教育の後退、全国一斉学力テストの実施とそのため成績競争、教員10年研修による管理強化など、教育現場はストレスを増加させ、いじめも増加しました。

そして、03年の学校復帰を強める政策が影響し、休めない、休んではいけない状況が生まれました。そんな06年の秋から冬にかけて、北海道でのいじめ自殺隠しの発覚、福岡県でのいじめ自殺など、いじめといじめ自殺にまつわる報道が一気に増えました。

一連のいじめ自殺に文科省にも予告があったり、大臣のあまり有効でないコメントが出されたのは、記憶に新しいことですが、東京シューレの子どもたちはめざましい働きをしました。合計すれば14～15人になる子たちが新聞やテレビの、面倒な、時には傷つく取材に応じ、あるいはシンポジウムに出演し、当事者ならではの発信をたくさんしました。受け止められ方が充分でない、と自分たちの生の体験と思いを載せた、「いじめ」という本も出版しました。彼らは、休んでいい、休む権利もあることを訴え、いじめに取り組んでいるつもりの教師や親が、実は、子ども自身の気持ちを置き去りにしてしまっていることに気付いていないこと、フリースクールや家でも育つことができるよ、と訴えました。

このいじめ自殺は少し大人の頭を冷やす役割を果たしたのか、「学校よりいのちが大事」「休んでもいい」という親を増やし、数年の間、微減傾向にあった不登校は再び増加に転じたのでした。

このような状況下で、フリースクールを一

時的に求める人が増えるものの、構造的な不況の中では、親もフリースクールに払うお金がきつい上、20世紀とは違って、不登校の子どもを受け皿といわれる適応指導教室、教育センター、チャレンジ高校、3部制定時制、通信制のサポート校（5日制、2日制など）、広域通信制のサテライト校、宿泊型民間施設などたくさん存在する時代になり、東京シューレも、子ども・若者の数が減ってくるという状況にぶつかりました。入会を待ってもらったり、どんどん入ってきてくれる子がいる時代とは違う中で、どう維持継続させていこうかという問題にぶつかり、この頃の理事会は、場所とスタッフ数をどう考えるかをめぐっての再編問題について議論を繰り返しました。特にシューレ大学は移転、新宿は場所の縮小案でしたが、大田シューレは閉室という苦痛の選択をせざるを得ず、子どもには申し訳ないことになりました。

（2）

しかし、子どもの権利拡充に発展性のある取り組みも進んでいました。

フリースクールに出会えてよかった、と感じる子どもが確実に存在する日本社会であれば、そして、実績も積んできた現在、支援の埒外に置かれ、卒業資格も出せず、公的支援もない等の不利益や格差がいつまでも続いているわけではないのです。

私たちは、IDEC、諸外国のオルタナティブ教育を知り、交流する中で、日本でも正規の教育機関としてフリースクールが存在して欲しいと考えてきました。そして通学定期や公的支援を求める援助の中で、小泉政権の措置改革特区の「教育特区」を活用すれば「市民がつくる学校ができるかもしれない、東京シューレのような子どもが中心の教育がそこ

で展開できるかもしれない」と感じました。

「校地・校舎の自己所有の緩和」と「小中の学習指導要領の緩和」の条件があり、さらに私たちの提案により「NPO法人立学校の可」「高校の学習指導要領の緩和」もOKとなったからです。

03年1月の保護者会でフリースクールの公教育化について初検討、9月に葛飾区の協力を得られることになりましたがNPO法人ではなく学校法人なら、という再提案がありました。それを了承したのが05年3月、6月のNPO総会で東京シューレ葛飾中の設立を正式決定しました。9月には、フリースクールの子どもたちによる子ども評議会が生まれ、毎月「どんな学校ならつくりたいか」を議論し、子どもが学校づくりに大きく関わりました。不登校の子どもの経験は、実に貴重です。学校でイヤな経験、学校で自分に合わない経験があったことを学校づくりに生かせば、歪んでいる学校、抑圧的な学校を居やすい学校、信頼できる学校にすることができ、安心して活用できます。これは、おもしろいことです。もちろんそれを選びたい子がくる学校であり、不登校も理解され、その子の気持ちペースが尊重される学校です。

06年1月には、設立発起人会が発足、7月には葛飾区が正式に特区認定され、10月には東京都より学校法人設立と中学校設置が認められました。そして、東京シューレの親・子・スタッフ・市民協力者に寄附・図書寄贈・掃除・その他多くの準備に協力いただき、07年4月無事開校しました。

法人の形は経緯上異なるのですが、シューレ中は、3周年を迎え、現在の子ども数108名、スタッフ常勤・非常勤20名、不登校の子どもたちによって創り続けられる学校となっていますが、王子シューレ・新宿シューレ・

柏の葉シューレそして葛飾シューレとして4つの場が子・親・スタッフの交流をしあいながら、安心度の高い子ども中心の教育を展開して、シューレの仲間は増えているのです。

これは、行政との連携でできたわけですが、この期、柏の葉が千葉県との協働で、県民プラザを無料で借り受け、週3日の開校、ホームシューレの在宅支援事業、フリースクールの居場所づくり事業に文科省の委託を受けるなど、行政との連携も進みました。行政を敵として考えていた時代から、どう子どもにとって意味のあることができる関係をつくり、理解をしてもらい、連携できるかの時代になっているのです。

(3)

09年8月、20回を迎えた夏の全国合宿のエンディングで、大変素晴らしいものが採択されました。「不登校の子どもの権利宣言」です。ユニセフに「いろいろタイム」で見学に行き、帰り際職員から「君たちは飢えもない、戦争もない、学校も行ける、幸せなんだ」と言われ、違和感を感じたのがきっかけとされます。不登校で出会った苦しさは何なのか、子どもの権利条約は、僕らも救うものなのか、それから1年以上の毎週の講座で1条ずつ読み議論し、原案をつくり、夏の全国子ども交流合宿の実行委員会に持ち込み、合宿の中でも討議、採択となりました。これは大変に評価が高く、全国の子どもの権利や不登校に関心のある人びとの中でネットや紙資料で広められ、集会でも取り上げられています。

また、大人たちもこの期、子どもたちのずっと続く苦しみを変えたいと政提言に取り組み、07年には『教育多様性への提言』をシューレとしてまとめ、ほんとうに実現するためには、一団体では無理と、「フリースクール全

国ネットワーク」に働きかけ、09年1月JDEC（日本フリースクール大会）では、「フリースクールからの政策提言」を提起しました。そして、2010年1月の第2回JDECでは、「オルタナティブ教育法（仮称）」という新法と「すぐにも実現させたい9つの提言」という2つの形で、子どもの権利の拡充としっかりした仕組みづくりに取り組んでいるところ です。

権利の具体化のひとつとして、高等部の通学定期適用実現や公的支援を議員に訴えている中で、08年5月「フリースクール環境整備推進議員連盟」が誕生、09年4月より、フリースクールに通う高校在籍者の出席認定と通学定期は実現する、という一部前進をみたものの、選挙と政権交代でストップ、要請し続けて本年6月1日議連が再始動そとところですが、議連にも、私たちの政権提言を持ち込んでいます。また、文科省の委託事業のお金で、「フリースクールQ&A」のパンフを作り、学校の教員にすでに1000部以上配布しました。

このように、かつては考えられなかった国

県区などと連携しつつ、多様な育ちの在り方を実現させようとしています。

また、全国から無料でどこからも誰でも子どもたちの電話が受けられるチャイルドライン体制づくりに協力し、シューレも常設化するなど含め、さまざまなNPOと連携して、子どもの幸せのために活動し続けてきました。基本にあったのは、親の学びあい、つながりあいです。保護者会はもちろん、登校拒否を考える会は2009年に25周年を迎え、渡辺位さんに記念講演をいただきましたが、残念ながら、長い間シューレを支えてくださった渡辺位さんは、09年5月永眠されました。渡辺位さんをアドバイザーに20年続いた親ゼミですが、渡辺位さん亡き後も、学んだことを生かし、考えあつていきたいと、現在も続けております。シューレは「登校拒否を考える全国ネットワーク」の活動を支えてきましたが、08年2月にそれもNPO化し、フリネットや不登校新聞社など不登校やフリースクールに関する市民活動と連携しながら、交流し、社会に理解を深めつつ子どもの状況を変えようと活動をしている日々です。

◎四半世紀を振り返って

四半世紀を振り返って、思うのは「不登校」への感謝です。自分をはじめは否定的に見え、社会も否定している「不登校」から、新しいつながりと日本社会にとても新しいものを創り出してきました。そのつながる力・創る力を生み出したものは、ダメに見えた「不登校」であり不登校を通して私たちはより深くものを見て、新しい文化や生き方を創り出すことになりました。そして、表面的ではなく、幸せとは何かを考えるようになりました。暗闇

と思ったものの中に光がありました。その学んだことを大切に、これからのシューレを皆さんで創っていきましょう。また、これまでつながったり支え手くださった子ども、若者、保護者の皆さん、スタッフ、こうし、ボランティアの皆さん、識者やフリースクール、親の会の仲間、海外の皆さん、私の友人、家族、その他多くの皆さんに、心よりお礼申し上げます。

東京シューレ 25年の年表

1984 年度以前

1984 **1** 登校拒否を考える会が発足

1985 **2** 東十条の九重ビルの一室を借りる

この頃…

- 84年8月 臨時教育審議会が発足
- 85年3月 ゴルバチョフ書記長が就任
- つくば万博開幕

1985 年度

1985 **4** OKハウスサロンを始める

6 初の説明会

24日 東京シューレオープン

8 夏合宿（栃木「らくりん座」）

9 『東京シューレ通信』第1号発行

1986 **1** お雑煮新年会

3 大雪の初舞台（メゾン一刻）

春合宿（千葉大原海岸）

この年…

- 85年8月 日航ジャンボ機墜落事故
- 9月 プラザ合意（バブル景気の引き金）
- 11月 阪神日本シリーズを制覇
- 86年3月 中野富士見中いじめ自殺

1986 年度

1986 **7** 一周年祭（飯田橋、東京都教育会館）

8 夏合宿（群馬）

この年…

- 86年4月 第2次ベビーブームのピークの年代が中学入学
- チェルノブイリ原発事故
- 11月 伊豆大島三原山大噴火

- 9 初の時間割変更
- 12 初めてのクリスマス会
- 1987 2 初めてのスキー合宿（山梨）
- 3 夜の学習塾部門を廃止

1987年度

この年・・・
87年4月 JR 発足
8月 臨教審最終答申
11月 大韓航空機事件
88年2月 ドラゴンクエストIIの発売
(販売初日、平日の行列が社会の話題に)

- 1987 4 高校年齢の子どもの受け入れを始める
- 5 アパートをもう一部屋借りる
- 7 二周年祭（王子の教会にて）
- 8 夏合宿（北海道緑町で）

- 1988 2 スキー合宿（浅間）

1988年度

この年・・・
88年6月 リクルート事件発覚
9月 ソウルオリンピック
朝日新聞「早期発見しないと
無気力症に」「20代30代まで
尾をひく」夕刊1面で報道
11月 文部省教師アンケートで
「登校拒否は怠け」の報道
89年1月 昭和天皇死去
3月 女子高生コンクリート詰め殺人
事件発覚

- 1988 5 『ぶっとばせ！体罰・校則・退学処分子どもたちの人間宣言』
- 7 三周年祭（水道橋神田パンセ）
- 8 北海道夏合宿（北海道緑町）
- 11 朝日新聞記事に対し『登校拒否緊急連絡会』を開催（日本教育会館）
- 12 シューレの子どもによる登校拒否アンケート取り組み開始

1989 **1** 『登校拒否は病気じゃない』出版

3 さらにもう1部屋を借りる

1989年度

1989 **4** 二部制開始

(小中等部は夕方まで
高等部は夜間)

この年…

89年4月 消費税(3%)導入

6月 天安門事件

11月 ベルリンの壁崩壊

国連総会で「子どもの権利条約」採択

7 四周年祭、子どもによる登校拒否アンケート 集計発表

8 北海道夏合宿(北海道緑町)

9 『子どもによる登校拒否アンケート』が報道され、各地から反響。

1990 **1** 登校拒否を考える全国ネットワーク始動(東京シューレが事務局を担当)

1990年度

1990 **6** 低学年部(小学3年以下)スタート
学生ゼミスタート

8 山口夏合宿(川上村 杉の子村)

11 文部省(当時)学校不適応対策調査研究協力者会議が

「登校拒否はどの子にも起こりうる」の認識転換を示す中間まとめを発表

12 五周年祭(江東区総合市民センター)

『学校へ行かない僕から学校へ行かない君へ』『東京シューレ物語』出版

1991 **3** 東十条から現在の王子ビルへ移転

この年…

90年7月 神戸女子高生校門圧死事件

8月 イラク軍がクウェートに侵攻

9月 東西ドイツ統一

11月 「スーパーファミコン」発売

1月 湾岸戦争

91年2月 「バブル不況」期に入る

1991年度

- 1991 **4** 運営委員会（現在の理事会の前身）発足
- 7** 6周年祭（王子シューレ）
- 8** 岐阜・高山夏合宿
- 1992 **3** 奄美大島登校拒否調査団派遣

この年・・・

- 91年6月 雲仙普賢岳火砕流で死者
7月 風の子学園事件
12月 ソビエト連邦解体
92年3月 学校不適応対策調査研究
協力者会議 最終報告

1992年度

- 1992 **6** 学割通学定期の運動の取り組みを始める
- 7** 7周年祭（王子シューレ）
初めてのいちごミーティング
第一回全国子ども交流合宿を広島で開催。
- 8** 夏合宿（広島 瀬戸内海）
- 9** 戸塚裁判判決緊急集会「命とひきかえの教育とは」（日本教育会館）
ウクライナを訪問して、原発事故被害に苦しむ子どもたちと交流
- 10** トヨタ財団からホームシューレ立ち上げ準備にシューレ初の助成金
- 11** 学割定期について、署名3万2000人以上を添えて請願
- 1993 **3** 運動が実り、学割定期の取得が実現する

この年・・・

- 92年7月 戸塚裁判一審判決
8月 文部省、登校拒否の定義を、年間50日欠席から30日に変更
9月 公立学校で、第2土曜日が休みに
93年1月 山形マツト死事件
業者テストを禁止、高校入試での偏差値排除へ

1993年度

- 1993 **4** 高等部 シアトルでの初の海外合宿

7 父母会にて、大田区の旧保育園取得を決定

8 第二回全国子ども交流合宿を日光で開催。気球を作って上げた

10 ホームシューレ開始

12 八周年祭（すみだ
リバーサイドホール）

この年…

93年5月 Jリーグが開幕
8月 細川連立内閣発足
10月 サッカー日本代表「ドーハの悲劇」
11月 EU発足
94年2月 米不足でタイ米を緊急輸入

1994年度

1994 **4** 大田シューレオープン
日米フリースクール交流

6 九周年祭（王子シューレ）

8 北海道夏合宿

9 ホームエデュケーション国際シンポジウム

この年…

94年4月 日本政府「子どもの権利条約」批准
6月 村山「自社さ」政権発足
12月 愛知の中学生大河内君がいじめを
苦しんで自殺。いじめが社会問題化。
プレイステーション発売
95年1月 阪神淡路大震災
3月 地下鉄サリン事件

『わたしはうちでやっていきたいの！』開催

1995年度

1995 **4** 大田シューレー周年祭

5 ホームシューレ小学生コーススタート
シューレ通信が100号に。

6 新宿シューレオープン

1995 **7** 八丈島・三宅島 夏合宿
ユーラシア大陸横断旅行（～8月）

9 『僕らしく君らしく自分色』出版

この年…

95年4月 オウム真理教松本智津夫逮捕
7月 スクールカウンセラーの配置開始
96年2月 「ポケットモンスター赤・緑」発売

10 長野草刈り合宿（ログハウス建設地）

11 十周年祭（ギャラクシーホール 王子シューレなど）
『学校の外 海の外』出版

1996 年度

1996 **6** 新宿シューレー周年祭（新宿シューレ）

7 夏合宿（長野県麻績村）

8 全国子ども交流合宿（箱根）

10 ログハウスが完成

1997 **3** 東京シューレ
ホームページ開設

この年・・・
96年7月 O157騒動、アトランタオリンピック
11月 たまごっち発売
12月 ペルー日本大使公邸人質事件
97年2月 神戸小学生連続殺傷事件

1997 年度

1997 **4** ホームシューレが王子から新宿（曙橋）へ移転

児童福祉法改悪阻止にむけて
『子どもの声をぶつける会』発足
大田シューレ三周年祭
（品川区中小企業センター）

5 児福法改正審議の国会を傍聴

7 夏合宿（沖縄）

9 サイバーシューレ開始

11 香港旅行

「学校だけじゃないんだよ！」不登校フェスティバル開催
（労働スクエア東京）

この年・・・
97年4月 消費税5%に。
5月 改正児童福祉法成立（不登校という理由で児童自立支援施設の入所対象にしない、という附帯決議案可決）
12月 ポケモンアニメ事件
98年1月 栃木中学生ナイフ事件
3月 NPO法 成立
「金八先生」にフリースクール登場

1998年度

1998

5

不登校新聞創刊

7

フレネ教育国際大会

(会場：自由の森学園)に参加

I D E C世界フリースクール大会ウクライナ大会に

シューレの子どもが初めて参加

アメリカ高校生と交流(王子シューレ)

夏合宿(佐渡)

8

全国子ども交流合宿『夏みかん』開催(東京 晴海)

10

ログハウスシューレスタート

11

フリースクール関係者などで「公的支援を考える連絡会議」を発足

来日したインド・フィリピンのストリートチルドレンと交流

しし座流星群合宿(新潟)

この年...

98年8月 文部省学校基本調査で、不登校の子どもが10万人を超えたと発表。
文科省が、民間を含む調査委託のSSPを予算要求

12月 NPO法施行

1999年度

1999

4

シューレ大学オープン

6

NPO法人設立総会

(新宿シューレにて)

登校拒否を考える会『十五周年の集い』(電通生協会館)

7

イギリスでのI D E C世界フリースクール大会に参加。

翌年の日本開催が決定

8

夏合宿(島根・倉敷・広島などをめぐる「びんぼう旅行」)

11

『たまの運動日』開催(北区内廃校にて)

東京都よりNPO法人認証

2000

1

NPO法人として活動開始

この年...

99年4月 都知事に石原慎太郎初当選

9月 東海村臨界事故

12月 流行語大賞トップテン「学級崩壊」

2000年1月 新潟軟禁事件などをきっかけに
引きこもりが社会的に注目

3月 プレステーション2発売

小渕首相 私的諮問機関

「教育改革国民会議」発足

2

韓国Hajaセンター訪問旅行

2000年度

2000

5

「子どもの日チャイルドラインキャンペーン」に参加。
来日したペルー・ナソップの子どもと交流（王子シューレ）

7

『フリースクールとはなにか』出版
IDEC世界フリースクール大会 日本（東京・千葉）で開催

8

夏合宿（松島など東北の「びんぼう旅行」）

12

東京シューレ15周年祭（労働スクエア東京）

2001

2

フリースクール全国ネットワークが発足
韓国交流・調査旅行

この年・・・
2000年5月 西鉄バスジャック事件
昼の連続ドラマ「キッズウォー2」で
フリースクール登場
9月 改正少年法が成立
01年1月 文科省・厚労省などに省庁再編。
2月 町村文科相「はき違えた自由が
不登校」を生むと発言。HPで釈明

2001年度

2001

6

「土曜サロン」開始（新宿シューレ）
シューレ大学第1回公開イベント開催（水道橋YMCA）

7

夏合宿（長野県）

8

全国子ども交流合宿「ちゃおりゅ」（東京晴海）

10

第1回フリネットスポーツ大会
ペルー交流旅行

2002

3

シューレチャイルドライン初開設
韓国代案教育交流調査旅行

この年・・・
01年4月 小泉内閣発足
5月 池田小学校児童殺傷事件
9月 アメリカ同時多発テロ
文科省「不登校追跡調査」発表
02年2月 戸塚裁判結審、実刑確定

2002年度

2002 **4** 新宿シューレとホームシューレが

若松ビルに移転。

6 シューレ大学3周年イベント（シューレ大学）

日韓オルタナティブ教育シンポジウム
（新宿シューレ）

ミニトレイン完成

7 夏合宿（大島）

「医療と不登校」アンケート集計

鈴鹿での「国際ソーラーカーレース」に
初出場で完走、34位

8 ニュージーランド I D E C 参加

9 「不登校政策を考える緊急集会」開催（新宿シューレ）

11 フリネット主催「カルチャーフェスティバル」初開催（港区内廃校にて）

週刊メールマガジン「シュメール」発刊

12 ペルー・ナソップメンバーが来日して、交流

2003 **1** 父母会で「特区を活用した学校づくり」構想を検討開始

2 アートフェスタ（若松）、東京シューレのロゴマーク決定

この年…

02年4月 「教科書3割減」
「総合学習」スタート
公立校で週5日制。

5月 日韓ワールドカップ
9月 文科省「不登校問題
に関する調査研究協
力者会議」発足

10月 田中耕一さんノーベル
賞決定

03年3月 SARS 世界的流行
中教審が教育基本法
「改正」を答申

2003年度

2003 **4** 吉川英治文化賞受賞

『IRIS』創刊

7 I D E C ニューヨーク大会に参加

この年…

03年4月 文科省協力者会議「働きか
け・関わり的重要性」などを特最終
報告をまとめ、発表

7月 長崎幼児連れ去り殺人事件、
沖縄中学生集団リンチ殺人事件

8月 文科省学校基本調査で、
不登校の子どもが28年ぶりに減少

04年1月 自衛隊をイラクに派遣
岸和田中学生虐待が発覚
子どもへの虐待が社会問題に

- 8 夏合宿（猪苗代湖）
- 10 千葉県教育委員会との協働事業 流山シューレオープン
- 11 朝日のびのび教育賞受賞
- 2004 1 登校拒否を考える会20周年記念イベント（新宿シューレ）
- 3 台湾調査研究旅行

2004年度

- 2004 4 シューレ通信200号！
- 5 『フリースクール白書』完成（フリネット）
- 6 不登校新聞からFonteに
- 7 大田シューレ10周年祭（こらぼ大森）
夏合宿（長野）
- 8 全国ネット合宿を成田で開催
- 10 大学5周年イベント（北区北とぴあ）
- 11 フリネット運動会
（せたがやプレイパーク）
- 12 IDECインド大会に参加

- 2005 1 （有）東京シューレ出版 設立
- 2 東京シューレチャイルドライン 常設（毎週木曜日）スタート
ホームエデュケーション国際シンポジウム開催（早稲田大学）

2005年度

この年・・・

04年6月 長崎小6女児殺害事件
10月 新潟県中越地震
福井県副知事「不登校児は
不良品」発言。後に陳謝。
11月 プロ野球新規参入で
IT企業が話題に
12月 スマトラ島沖地震・津波
05年3月 愛知万博開幕

2005

5

文科省とフリースクール等NPOとの懇談会に参加
初の文科省委託事業を受ける

6

20周年祭（新橋ヤクルトホール）

20周年記念出版『子どもがつくる・子どもとつくる』・
『学校に行かないハローワーク』（東京シューレ出版）発刊

20周年記念事業 OBOG調査報告『今、ここに生きている』完成

8

『不登校という生き方』（NHK出版）発刊

9

「フリースクールの学校をつくる子ども評議会」活動開始

テレビ電話による「ライブシューレ」本格開始

新宿シューレ10周年祭（新宿シューレ）

10

シューレ大学公開イベント（梅窓院ホール）

12

『子どもは家庭でじゅうぶん育つ』（東京シューレ出版）発刊

2006

1

学校法人東京シューレ学園設立発起人会発足

記念公開シンポジウム（新宿シューレ）

この年・・・

05年4月 JR 福知山線脱線事故

8月 大検に変わる「高認」試験初実施

大田大阪府知事(当時)「不登校半減政策」で釈明

9月 文科省、高校での不登校について初調査の結果を公表。

9月 小泉郵政選挙で自民党圧勝

06年2月 トリノ五輪、「イナバウワー」が話題に

2006年度

2006

7

葛飾区特区が内閣府より認定を受け、学校設立への条件が整う
夏合宿（道東）

8

Fonte200号

11

いじめ・いじめ自殺の取材をメディアから多く受ける

学校設立が東京都より認証される

シューレ大学国際オルタナティブ映像イベント（東京国立博物館内）

2007

3

政策提言『教育多様化への提言』をまとめる

この年・・・

06年6月 秋田で連続児童殺人事件

9月 安倍内閣誕生

10・11月 福岡・北海道などでのいじめ自殺、文科大臣への自殺
予告手紙など、いじめ・自殺への社会的関心高まる

12月 教育基本法が成立・施行

07年1月 食品偽装が問題化

3月 「消えた年金」問題発覚

2007年度

2007

4

「東京シューレ葛飾中学校」開校

流山シューレから移転して「柏の葉シューレ」スタート

ホームシューレ・Fonte編集局が王子ビルに移転

シューレ大学が若松ビルに移転

6

東京シューレ葛飾中学校「開校を記念する会」開催

王子・新宿・柏の葉・葛飾合同で、
初の交流スポーツ大会

7

王子・新宿・柏の葉 長野（ログハウス）合宿

8

葛飾 箱根夏合宿

全国ネット合宿（伊東温泉）

10

葛飾中学校 文化祭を「大葛祭（だいかっさい）」と名付けて、初開催

11

フリースクール全国ネットワーク「カルチャーフェスティバル」

葛飾を会場に開催

葛飾中学校 初の修学旅行「そうだ京都へ行GO！」

ロシアMIFS学生 来日して、シューレ大と交流

12

王子・新宿・柏の葉・葛飾合同の保護者会（葛飾）

2008

1

シュールの活動を網羅する「東京シュール総合ホームページ」を開設
葛飾区で親の会をスタート

2

「登校拒否・不登校を考える全国ネットワーク」NPO法人に移行

3

葛飾中学校「旅立ち祭」で初の卒業生

王子など「沖縄合宿」を実行

大田シュール 閉室

国内外のオルタナティブ教育実践報告『子ども中心の教育最前線』作成

この年・・・

07年8月 文科省調査で、不登校の小中学生の数が再び増え始めたことがわかる
米サブプライムローン問題から世界的不況が広がり始める

9月 福田内閣誕生

12月 南部陽一郎氏、小林誠氏、益川敏英氏、下村脩氏がノーベル賞受賞

2008年度

2008

5

フリースクール環境整備推進議員連盟が発足

6

NPO・学園合同イベント「いま子ども中心の教育がおもしろい」開催

8

シュール大学国際映画祭「生きたいように生きる」初開催

9

京都施設での虐待暴行事件を受けて、NPO・学園連名でアピール発表

2009

1

JDEC日本フリースクール大会第1回を開催

3

登校拒否を考える会25周年記念イベントを開催

文部科学省委託事業で『フリースクールQ&A』を製作・配布

この年・・・

08年4月 スクールソーシャルワーカー全都道府県に配置

6月 秋葉原で無差別殺人事件

8月 北京オリンピック

9月 麻生内閣誕生

11月 オバマ米大統領誕生

12月 「年越し派遣村」開設 非正規雇用の問題浮き彫りに

2009年度

2009

5

渡辺位さん永眠

8

登校拒否・不登校を考える全国合宿 20回記念大会（早稲田大学にて）
「不登校の子どもの権利宣言」を発表。

2010

1

第2回JDEC大会、韓国代案学校スタッフ生徒と交流

オルタナティブ教育法案づくりに参画

シューレ大学設立10周年記念イベント「〇〇解放宣言」

（新宿区角筈区民ホール）

フリースクール アラスカ旅行

2

『閉塞感のある社会で生きたいように生きる』出版

3

ホームシューレ地方サロン開催年間100回を超える

この年…

09年4月 学校に籍のある高校生の通学定期が実現

5月 新型インフルエンザが日本でも感染拡大

7月 国内で46年ぶりの皆既日食

9月 民主党を中心とする連立鳩山内閣発足。

「事業仕分け」など話題に。

2010年度

2010

4

イスラエルIDEC参加

6

ホームシューレ『ばる～ん』『メッセージ』200号に

東京シューレ葛飾中学校3周年記念イベント

「子ども中心の教育を求めて」開催

7

「東京シューレ25周年祭」開催

この年…

6月 菅内閣発足。